

自分の問題として考える

教育情報第四号は、「新潟県の学校を考える。」を特集として組んでおります。そして、子どもの中にあらわれている諸問題に対し、どのような実践をしているのか、父母や地域の願い、要求にこたえるべきどのような実践をしているのか、学校を真に教育の場とするために、どのような障害や克服すべきことが、現在の文化状況や「教育体制」「教師集団」の中にあるのか等々が報告されています。

私は、それらの実践や報告の核心（＝教育思想と言うべきでしょうか）に学び、ここで今一度、自分の現在の実践の意義や意味、日頃もっている問題意識等を、整理してみたいと思います。

まず第一に、「父母から見た学校」とはとりもなおさず、担任の実践を通して見た学校ということであり、それは、何よりもわが子の状況、変容を通して評価されるということことです。そういう点で、小林光子先生の「T君と私の育ち合い」に、何ともいえないすがすがしさを感じました。日々の忙しさと困難さにともすれば、押し流されそうになる自分―大切なことは、解釈することではなく、変革することだと頭ではわかっていても―にとつて、小林先生の「弱さをかかえ、それを乗りこえようとしているT君は、私自身でした。弱いからと、不満の一語も言えず、負け犬になっっているクラスの子供達もまた、私自身で

した。」「ありのまま受けとめる」という事は、目の前にいる子……をどれ程の共感で受けとめられるか……。」「そして、共感、は何よりも、一緒に何かとくりくむ事から生まれるのではないか……。」等々の言葉は、心にさわやかさと共に、きびしくひびきました。この言葉にあらわされている教師としての第一義的な基本的資質、感性を自分は日々きびしくきたえてきただろうか。そして、もし一人ひとりの教師が、さらに教師集団がそのような感性、このようなみずみずしさで、子どもに接しているなら（もちろん、これは必要条件であり、十分条件ではない）、親は子どもを通し、担任を、そして学校をもっともっ



山崎 徹

信頼してくるのではないだろうか……。

つぎに学校そのものが、父母や地域に信頼される、要求にこたえるとはどういうことかという問題です。私は以前には、「まず自分のクラスを変えよう、次に自分の学年を変えよう、そして学校を変えよう。」と形式的に考えていました。それは実践的には、「自分がまずきちんとやれば」「自分のクラスだけは」ということにおちいりやすい。今問題なのは、トータルとしてのその学校の教育活動、実践の基本が問われているのです。そのためには、次のようなことを考えなくてはいいけないと思います。

一つは、学校に対する父母の要求や願いとは何なのかということ。一般的には、「どの子にもきちんとした学力をつけてほしい。」「子どもが喜んで登校するような学校であってほしい。」等々でしょう。が、自分は本当に親の真実のねがいに合致するような実践を行っているのだろうか。自分が「よかれ」と思ってやった実践が、逆に批判を受けたりするたびに、考えさせられます。そういう点で、座談会のまとめの「結局、子どもに力をつけ、その力を自覚させるといふ時、そこでいう力とは何なのか……それが父母をも真に説得しうるものにならなくてはならない。」ということ。私たちは、もっともっと深く、いかに期待を一般にこたえたいと思いません。父母のねがいが期待を一般的にとらえるのではなく、もっともっと内容豊かなものとしてとらえて、

いくこと、それを科学としての教育とまきむすぶよう理論化していくことが、求められているのではないかと思えます。木村論文で、そのへんをもっともっと下げてほしいと期待していたのですが……。私たちは、現場の実践家です。大槻先生の「国民の要求との問題で、学校のあり方を問う」という「提言」を実践的に追究していきたいと思えます。

二つめは、教師集団の問題です。それは、「学校全体の合意」ということでしようが、学校全体の教育活動が問題になる以上、私たちは教師集団とその質にも責任をおわなくてはいいけないと思えます。稲葉先生は、「事実認識での一致」「教育で団結する」ことが大事とまとめておられます。私は、それ以前のことを問題にしたいと思えます。それは、教師の人格的自立＝教育者としての自立が日本では、とりわけ新潟県では、おかれているのではないかということ。人と人との合意が成立する前提はまず、一人ひとりが独立した人格として自立することです。そういう点で、「自分はこの学校の子に責任をおっているのだ。」「だからこの子どもたちに必要な苦勞もいとわれない。」「そして、自分は私心なく判断し、こう考え、このような実践がいいと考える。」というような自信や誇りが、教師全体にうすいのではないのでしょうか。そして、本音の出ない、出せない職場、最後まで自分の責任として、子どもを見きれない、そんな風潮があるように思います。基本的に

は、日本でブルジョア民主主義革命が不徹底だったことに起因すると思えますが、それゆえなおさら、「地域や父母に信頼される学校作り」「校長、教頭も含めた教職員集団作り」は、職場や教育界の民主化と不可分だと思えます。そのためにはまず、自覚した心ある教師が、声高らかに本音を出していく——そのことが、大事ではないか、そして本音を出しても、不利益をこうむらないような職場を作り出していくことが、大事ではないかと考えます。

以上の他、「今、子供たちに『ゆったりした時間』がほしい。」「(座談会)ということでは、発達における「緊張と弛緩」の問題について考えさせられましたし、「何としても、子どもたちを、しめてというか、こっちが管理的にしめていくといえ意味ではなく、しまってもらわなければならない。」「(座談会)では、いわゆる「管理主義」と、「本当の規律」のちがいを理論的、実践的に明らかにしていかなくてはと、考えさせられました。

最後に、学校が教育の場として、その本来の純粹さや、すがすがしさをとるもどすため、何をしなければならぬのか、また、具体的な実践の中で、どう父母や地域ときりむすんでいったらいいのか。——このような観点で、自分の実践の質を検証してみなくてはと、痛感させられました。

(西蒲・分水町立国上小学校)